石井米雄；横山良一．『メコン』めこん，1995，192 p.，カラーグラビア写真79葉．

必ずしも学術書ではないこの本を，このような学術雑誌の書評欄に紹介するのは，ふたりの著者にとっては迷惑なことであるかもしれない。それは承知の上で，私としてはこの場をかりて，メコンのような大自然に人の手を加えるとはどういうことなのか，ということを，本号別項で紹介した堀博著『メコン河——開発と環境』と関連させて考えてみたかったのである。

「眼前のメコンは，人間の歴史などまるで眼中にないかのように，ただもくもくと茶褐色の巨大な水のかたまりを運び続けている。その姿は28歳の私を感動させた」。爾来，石井米雄教授はメコンへの関心を40年近くも保ち続けて今にいたる。この間のメコンとの関わりを，「私的なメコンの物語」として紀行文のかたちで私たちに物語ってくれる。

「メコンのすべてを見たいと，源流チベットから南シナ海まで，戻ることのない河の流れのような旅」を続ける1950年生まれの写真家横山良一氏の，カラーグラビア写真79葉からなる「写真叙事詩」は，石井教授の縦組みの紀行文の後側から，横組みでメコンの流れに沿うように展開する。氏のすべての写真に通低する気分は，一言でいうと，「静謐」である。

「私的な物語としての紀行文」と「メコン写真叙事詩」であるからには，この本の構成や論理性などを詮索する必要はない。紀行文は，石井教授が28歳ではじめてメコンに接した1957年から，ごく最近の旅行までを含む幾度かの紀行のフィールドノートから再構成され，河口からチェンセンまでのすべての区間をカバーするように工夫されている。石井教授の視点は，「時には国際法秩序を生み出した歴史的産物（国境）の存在を忘れ，そこに住む住民の目で空間を眺めてみることも必要なのではあるまいか。そこから，世界地図が隠してしまった別の世界の図柄が見えてくるかもしれない」という文章に集約されている。

とは言え，この本の通奏低音は，メコンとその支流の，水運（や陸運）による地域間の交易，その結果としての経済圏や政治圏成立の歴史的考察である。ボートに乗ってメコンを上り，下り，また川沿いに車を走らせつつ，眼前に展開する景観を流麗な筆致で記述しながらも，著者は，その地域の歴史像の中にフッと読者を誘いこんでしまう。例えば，東北タイのムーン川のかつての舟運の原風景，多くの大支流が流れ込むストゥントレンを中心として形成されたであろうアンナン—ストゥントレン—カンボジア北部—タイを結ぶ広域交易回廊の存在の可能性，アンコール文明の経済を支えたであろうトンレサップ湖とメコン河の水運交易の殷賑ぶりなど，地域史への新鮮な視点を与えてくれる。サイゴンから中国西南部への舟運路開発を目的として行われた1860年代のフランスのメコン河踏査隊が，サンボールへんからいくつものラピッドに遭遇し，コーンヌの滝に行く手を阻まれるに及んで，ついに舟運開削をあきらめてしまった顛末も詳しく語られる。ここらは，歴史家としての石井教授の面目躍如たるものがある。

メコンに住む住民の目で見たメコンはどう描かれているであろうか。ルアンプラバンからチェンセンに通う定期船が，急流にさしかかるたびに船客を下ろし指図して岸から引綱で引っ張らせながら，舟子たちはといえば，船首に立ってエイ，エイと足踏みするばかり。実はこうして舟魂を元気づけなければこの急流はとても乗切れないという，ほほえましい光景が好意をもって描写される。あるいは，最新式フェリーの恐らく数百分の一のコストしかかけていないようなオンボロ木造フェリーが，見事な舵さばきでメコンを行き交いする様を暖かく見守っている。

昨今のテレビドキュメンタリーなどで，例えば，深くシワを刻み込んだメコンの漁師の顔を大写しにし，「もう開発はいい，メコンはこのままそっとしておいてほしい」と言わせたりする。堀氏がメコン委員会を通してメコン開発を論じ，そして石井教授が歴史家の目でメコン流域の歴史像を語るときには，いずれも極めて迫力があり，説得力がある。ところが，地域の住民の目を通して見，かつ語らせようとするときには，三者三様に甘くなってしまう，といえば言い過ぎであろうか。より深く住民に接する中から，彼らの自然観，風土観，生活観，開発観などを自然なかたちで語らせるような，メコン地域研究が待たれるような気もするのである。

（海田能宏・東南ア研）